

もりぐち ぶらり歩き マップ

史跡散策コース I (らくらく) 文禄堤・京街道・守口宿コース



きゅうとくながけじゅうたく
○旧徳永家住宅



なんしゅうじ
②難宗寺本堂



じょうせんじ
④盛泉寺本堂



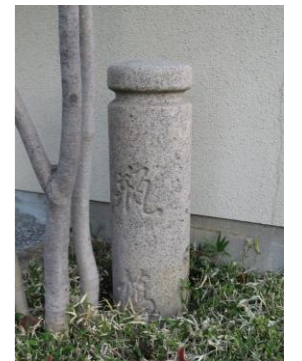
いちりづかあと・かみのみつけ
③一里塚跡・上見附



○竜田通 たつたどおり
(右手に②⑥守口宿本陣跡、右奥に②⑤難宗寺)



○来迎坂上の道標



かめはしあと
○瓶橋の跡

スタート 京阪電車守口市駅東口 - (20m) - ○「文禄堤の町」石碑(駅北西広場内) - (30m) - ○十三夜坂 - (100m) - (②⑧文禄堤・京街道・守口宿) - ○復元高札場 - (150m) - ○旧徳永家住宅 - (50m) - ○来迎坂 - (150m) - ⑤難宗寺 - (100m) - ④盛泉寺 - (100m) - ○瓶橋の跡 - (150m) - ③一里塚跡・上見附 - (320m) - ⑥守口宿本陣跡(説明板のみ) - (20m) - ⑦大塩平八郎ゆかりの書院跡(説明板・石碑) - (20m) - 八島交差点付近 (高札場跡) - ⑧京街道・本町橋・守居橋経由 - (720m) - ○下見附 - (200m) - **ゴール** 京阪電車守口市駅西口 (全 2,130m)

(○番号は守口文化財ガイドマップと共通)



おしおへいはちろう しょいんあと
⑦大塩平八郎ゆかりの書院跡



もりいばし ぶんろくつつみだんめん
○守居橋と文禄堤断面

(○番号は守口文化財ガイドマップと共通)

じゅうさんやざか

○十三夜坂

京阪電車守口駅北西駅前広場から、文禄堤上の京街道に上がる坂道。ここが京街道と中高野街道の分岐点とされています。



十三夜坂の坂道

きゅうとくながけじゅうたく

○旧徳永家住宅

旧京街道（文禄堤）の宿場であった守口宿に位置し、間口十間の主屋があり、座敷周りに前庭が広がっています。住宅は木造二階建て、二階部分が低い厨子（ずし）二階という形式で、当時の守口宿の町屋特有の伝統的構成を継承しています。

貴重な歴史的景観を残す建造物であることから、令和3年に市が取得し、単に「保存」するだけではなく、市民が日常的に訪れることができ、文禄堤の歴史性を誇りに感じる、地域コミュニティの核になるような場となるよう、民間事業者の運営により各種店舗や貸農園をはじめ様々なイベントを開催しています。



土間



土蔵

らいこうざか

○来迎坂

文禄堤上の京街道から東に折れて、奈良街道に入る石段の下り道です。坂の上に「右ならのぞきみち」の道標があります。石段を下ったあたりが「来迎町」で、来迎寺が元はこのあたりにあったことによります。



来迎坂の石段

ぶんろくづつみ・きょうかいどう・もりぐちしゆく

⑳文禄堤・京街道・守口宿

文禄堤は、豊臣秀吉が文禄5年（1596）に、毛利輝元・小早川隆景・吉川広家の三家に命じて築かせた淀川左岸の堤防で、堤防上は京都大坂間の最短陸路として、京街道となりました。

文禄堤は総延長約27kmとされていますが、度重なる淀川の改修や開発工事等で堤の多くは姿を消しており、守口でのみ面影をしのぶことができる貴重な文化財です。

なんしゅうじ

㉕難宗寺

蓮如上人が、文明9年(1477)に創立した守口御坊が始まりと伝えられ、慶長16年(1611)に本願寺掛所に昇格し、西御坊と呼ばれるようになりました。慶長20年(1615)の兵火で焼失し、寛永13年(1636)再建されたが、その後もたびたびの風水害などで朽廃したため、石清水八幡宮護国寺仮堂の古材を再利用して、文化7年(1810)に再建されたのが現在の本堂です。

境内には樹齢約500年、樹高約25m、直径約1.5m、枝張約15mの大イチョウがあり、秋の紅葉の頃は、本堂前が黄色の落葉で埋め尽くされます。昭和50年に大阪府の天然記念物に指定されました。



難宗寺のイチョウ

じょうせんじさんもん・へいじゅうもん

㉔盛泉寺山門・屏重門

盛泉寺は東本願寺の末寺で、教如上人を開基として慶長11年(1606)に創建されたとされ、東の御堂さんと呼ばれています。

本堂は慶長20年(1615)の兵火により焼失し、その後、寛永年間(1624～44)に再建され、現在の本堂は天保6年(1835)再建のものである。入母屋造本瓦葺で、桁行・梁行とも五間で、周りに一間の庇をめぐらせています。明治天皇の大坂行幸の際、当寺は内侍所の奉安所となり、屏重門前には「史蹟 内侍所奉安所趾」の石碑が建っています。



盛泉寺山門・屏重門

かめはしのあと

○瓶橋の跡

瓶橋は守口町の北の境にあった橋で、ここより北は江戸時代以降にできた新しい町になりました。「口を守ること瓶の如し」を「守口」にかけて命名したと言われる。もとは板橋で、のち土橋になり、さらに石橋に架け替えられた。現在は暗渠となり、石柱のみが橋の存在を示すものとして残っています。

いちりづかあと・かみのみつけ

㉓一里塚跡・上見附

一里塚は、二代將軍徳川秀忠が五街道を整備した時、一里(約4km)ごとに街道の両側に土を盛って里程の目標にしたもので、多くは榎・松の木が植えられてました。浜町二丁目にある京街道の一里塚跡には、今は記念碑が建てられています。



一里塚記念碑

一里塚付近は、守口宿の「上見附」、すなわち宿場の江戸側の出入り口にあたり、大名が通過したり宿泊する時は、庄屋などの宿役人や村役人が、麻上下などを着用して、この一里塚まで送迎しました。

もりぐちしゆくほんじんあと

㉖守口宿本陣跡

本陣とは、江戸時代の全国の宿場に設けられた、大名・幕府役人・勅使・宮門跡等の宿泊のための屋敷のことです。

守口宿本陣のあったところは竜田通一丁目付近で、ここは現在も道路幅が広がっています。

守口宿の街道幅は2間半(約4.6m)と定められていましたが、ここは15m余りもあり、この場所で人や荷物の継立が行われたため道幅が広がっています。

おおいへいはちろう しょういんあと

㉗大塩平八郎ゆかりの書院跡

近世守口町の豪農白井家の当時の当主孝右衛門は、大塩の私塾洗心洞の有力門人で、経済的支援も行っていました。天保年間にききんが続き、大坂市中にも犠牲者が続出したが、大坂町奉行所の役人はなんら対策を立てず、商人もその機会に利益を得ようとした。そこで東町奉行所元与力の大塩平八郎は、幕府や商人に天誅を加えて窮民を救うべく、門下の与力や同心、近在の富農達と謀って挙兵しました。

これが天保8年(1837)の「大塩の乱」です。この書院跡は歴史上の人物にゆかりの場所といえます。



現在、この場所には、記念碑が建てられています。 かつての書院の様子

ふくげんこうさつば

○復元高札場

守口宿の高札場は古絵図によると、京街道が文禄堤から分かれて難宗寺の方に折れるところにありました。京街道が八島交差点に下りていく坂道は「札場坂」といい、かつての地名も「札ノ町」と呼ばれていました。

現在、本町2丁目3付近に、寄付によりその高札場が復元されています。



復元高札